

# キモノとトッパー

長野まつ・阿部けい子

合成繊維の出現に伴ない、いわゆる「新しいキモノ」が和服デザイナーによって続々発表され、業者の宣伝の波に乗って一般大衆に迎えられるようになった事は、わが衣服史上劃期的な事といわねばならない。然し、この新しい「キモノ」も、内容的には新しいものではなく、既に40年前に芽生えている。その経過を簡単にたどって見ると

1) 大正九年、時の商工省の広巾物奨励に始まる。即ち、国内向織物を輸出向に転換さす為に輸出向織物と同一織機を用いて、すべて広巾物とする事は国家経済上ひいては国民経済上即ち消費者側よりすれば必要量に応じて求め得られる事、縫目を省き、縫込量を少くして、仕立の労力及布地の節約となる事、等々。——これらは広巾物裁方図と共に大いに宣伝されたが、国内の業者間に支持なく、又一般大衆は無関心で僅かに識者の間に認識されたに過ぎなかった。

2) 才二次世界大戦中、国民服として男女別に、甲型、乙型の標準服がきまった。女子の和服式乙型は二部式、即ち上衣と下衣とに分れ、袖は筒袖、又は元祿袖、下衣はモンペか巻きスカート式で、帯は半巾帯であった。これは戦時及戦後を通じて衣料品の欠乏を補うためや女子の活動を活潑にするために大いに役立った。

3) 二部式衣服のモンペの簡易生活に慣れた一般家庭婦人及女子の職場進出に伴ない、洋服生活になってきた事は当然の事である。配給衣料品に続いて簡単服地の出廻り始めると共に、夏期は老幼各層こぞって簡単服が普及した事は、戦前に見られなかったところである。

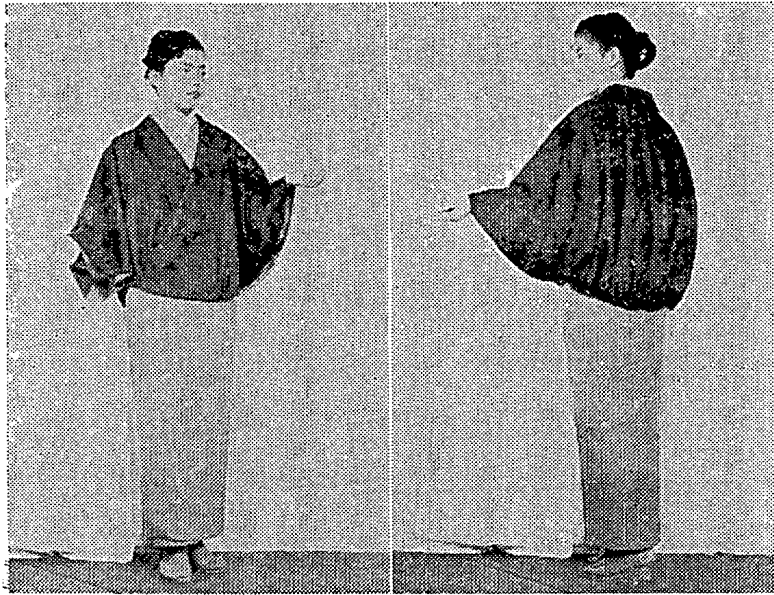
4) 和服染織業界の復興と共に、和服に対する年配婦人の郷愁ともいうべきか、和服着用者も漸次多くなって来た。化繊広巾生地が続々と生産され加うる

に和服デザイナーの発表や、業界の宣伝戦が展開されつゝ、ようやく既製服利用の簡易生活が一般に認識される機運が動いて来ているのが現状といえよう。

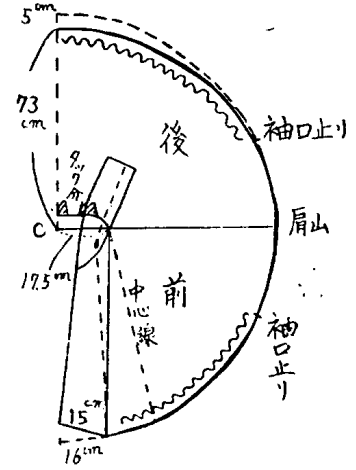
5) トッパーについてはキモノと違ってドルマン風の袖や大きな衿、肩下り等の婦人洋服型式がとり入れられて、こゝに和服防寒用として出現（昭和32年……）したことは従来の和装に見られなかったことである。そして次々に以前からあった和服コートや、被布衿などが自由に応用されつゝ季節的に現在の流行を支配しているのではないかと思う。

6) 次に結び帯に一言触れたい。伝統的な女帯については、既に大正年間、戸田博士によって、非衛生的な点が大いに指摘された。結び帯については昔から芝居帯を始めとして種々な新作品もあったが、当時の一女学生は、「フン……女中帯か」ともいった。又あるインテリ婦人は「結び帯は其の都度気分に応じて結び替える事が出来ない。」又「簞笥に納めにくい」ともいって、戦前には一顧にも付されなかったのである。それが現在は、若い人は無論の事、年配向きの人々の間にも賞用されている事は、宣伝の世の中とはいえ、隔世の感が深い。歴史は繰り返す。一枚の長着が「ワンピース」で、二部式が「ツーピース」となり、羽織と対の着物が「アンサンブル」と、単に名称が変わったに過ぎないとはいえ、袖丈が短くなり、布地の選択によっては、裏地をつけないで、そのまま着用出来、洗濯、仕立替の労力を省ける事は、家庭婦人に取っては最大のよろこびというべきであろう。いわゆる、新しい「キモノ」には色彩の応用によって突飛なものも多い。又眼を見張らず如き変わったデザインのものも続いて出現しつゝあるが、私達の欲するものは、特種の環境と特種の婦人に用いられる奇抜なものではなく、平凡な街着であり平常着である。着易く活動し易く、手入労力を省くもの、しかも漸進的に多少の感覚的な新しさをも欲する。時には古代ギリシヤの彫刻や古代仏像の着装に見られる、かの流線の美を、和服にもと思うこともある。たまたま先頃衣服学会より、次のテーマと布地を与えられたので試作してみた。





トッパ一裁断図



短くし、袖口明は 10cm にして、トッパ一と合せて大きく舟底型にする。

(2) 肩より 40cm 即ち帯下にかくれる位置にペプラムを付ける。

## B 下衣 (スカート)

(1) 深さ 1 cm 間隔 2 cm のプリーツをたゝむ。腰の膨みや動きの多い箇所には、プリーツを多くして、其他は感覚的に配置した。

(2) オレンジイエローの人絹布を上前に当る所の裏に毛抜合せにつける事により、裾さばきと色調をより良くしたつもりである。

C 上衣、下衣共紐と環とで留めて着装を容易に衛生的にかつ、しっかりさせる。

## (二) トッパ一

(1) 背中心より手首迄の長さ (ゆき) を半径にした円形裁ちにして、後丈を 5 cm 程短く裁ち落す。

(2) 衿肩明に向って前を真直に裁ち、左右に開き適当に折って衿とする。

(3) 衿を付けてから、これに合わせて表衿と見返しをつける。(この様なショールカラーの場合は、表衿分として W巾 50cm を必要とする、)

(4) 表裏の円形をつき合せに、衿を除いて、そのまま縫い合せ、従来の袂とい

う観念を離れて袖下全部を明ける事にする。

(5) 袖口下で前後の身頃の裾をしぼって紐を結ぶ。

### ㊦ 帯

(1) キモノの裾布と同色の細帯。

(2) 前胴廻り巾 12cm の二重巻きで、結び目の巾は 15cm とし、1貝の口又は蝶結びにする。

## 4. 概 感

### ㊦ キモノ

(1) 使用した布地は、やゝほつれ易いので、なるべく裁目の箇所を少なくし、縫代を多く取る外は特別の注意は見当らなかった。

(2) プリーツ性は、レーヨンと混紡の為、永久的なプリーツ性は望まれないが、繊維の種類と混紡量及プリーツ加工法により適合させる事は充分可能であると考えられる。

(3) 下衣のプリーツにより腰や膝の膨みと、動作に順応させる事が出来る。殊に歩行の度に波のようにうねる動線は潑刺とした美しさがあり、あまり期待出来なかった布地もこれで生きてきたと思う。無地物、柄物にも、場合によっては面白くなるのでないかと考えられる。

(4) プリーツによる細い縦線は下肢を長く見せ身長をより高く細く見せるものである。特に上衣のペプラムの上から下衣を付けて、従来の端折を無くすれば、縦線を一層強調させて効果的である。又反対に、上衣のペプラムを上にして着用すれば若々しく可愛らしい感じが出て来る。更に狭い明るい色調の細帯をしめれば最も効果があると思う。

(5) 裾布の人絹は、洗濯丸洗いには適さないが同繊維で適当な布地、又、色調が得られないので、便宜上つける事にした。歩行毎に散見する小部分の色調は、帯と共に同色系のキモノとトッパーの静かな色調を破って非常に効果的であったと思う。

### ㊦ トッパー

- (1) 全円形である為に仕立にかゝる前に布を垂らして充分延ばす必要がある。又、袋の入らぬように表裏の釣合を良くする事が大切である。
- (2) このトッパーは若い人にも、年配向にも着易い面白味のあるものと思う。
- (3) 布の持味を生かす為に、丸味のあるマント式に型紙を用いずに誰にでも、容易に仕立てられるのが特徴といえよう。
- (4) 裏布は表布との配色上、グレー系統を用いたが、若い人には配色を考慮すれば、動作につれて裏地の散見するのも美しく、春先や初冬のトッパーとして風変わりであると思う。脇下の紐は、中に入れても、又自然に外に垂らせても若い人には愛らしいものである。

以上、私達の試みた作品は、実に貧しいものである。始めて布地を手にした時、果して題目にふさわしい新感覚的なものが出来るかどうか、然も、締切日までわずか一週間余り、授業をしながらの合間合間のこの期間は余りにも短かすぎた。熟慮の余地もなく、危ぶみつゝの泥縄式の日々であった事を恥しく思う。従って被服研究室の松村季三代氏の適切なる助言と、森島、井上両研究助手の労力に負う所多く、とにかく締切日に間に合せられた事は、研究室の和の総力の結集の結果であった。

街着として突飛に走らず、誰もが簡易に作られ、容易に着られ、より美的に、より活動的に然もそこに多少の新感覚を追求したつもりであるが、その作品の価値如何は、これらを長期にわたって着用してこそ始めて見出されるのではあるまいか。なお、発表会にあたり、衣服学会長緒方洪平先生、顧問上村六郎先生、会員デザイナー河合玲子氏より望外の賛辞と激励を与えられた事により、この貧しい一試作品が、これを契期として、今後私達の研究の端緒となり、大いなる示唆を与えてくれるだろう事を思う。終りに心よく布地の提供をしていただいたカネカロン株式会社に、深甚の謝意を表したい。

(昭和33年12月 衣服学会にて一部発表)